

マリーナ・カー『猫ヶ沼のほとりで』論

河野賢司

(I) 著者略歴

マリーナ・カー (Marina Carr¹⁾, 1964.11.17-) はダブリンに生まれた。幼いときに母親をなくし、10歳から17歳までは、アイルランド中部のオフアリー州ゴートナモナ (Gortnamona, Co. Offaly) で育った。ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン (UCD) で学士号、修士号を取得している。『暗闇に低く』 (*Low in the Dark*, 1989), 『鹿の降伏』 (*The Deer's Surrender*, 1990), 『この愛という代物』 (*This Love Thing*, 1991), 『ウラロ』 (*Ullalo*, 1991), 『マイ』 (*The Mai*, 1994), 『ポーシャ・クフラン』 (*Portia Coughlan*, 1996) など、着実に劇作家としての地歩を固め、1998年10月7日にダブリン演劇祭参加作品としてダブリン、アビー劇場で初演された本作『猫ヶ沼のほとりで』 (*By the Bog of Cats...*, ²⁾ 1998) は第7作にあたる。この作品は、ロンドンのウィンダム劇場 (Wyndham's Theatre, Charing Cross Road) でも2004年11月19日から2005年2月26日まで、映画『ピアノ・レッスン』 (*The Piano*, 1993) の名女優ホリー・ハンター (Holly Hunter, 1958-) 主演で再演され、好評を博したようである。

本作以降も、『ラフタリーの丘で』 (*On Raftery's Hill*, 2000), 『エーリエル』 (*Ariel*, 2002) を発表し、いまや現代アイルランド演劇界における中心的劇作家の地位を確保しつつある。

(II) 『猫ヶ沼のほとりで』の梗概

まず、芝居の梗概を詳細に記述しておく。設定された時は「現在」(初演の1998年ごろ)。場面は著者の故郷のアイルランド中部地方と想定され、具体的には以下の通り。

第1幕 ヘスター・スワンの家の庭と猫ヶ沼のトレーラー・ハウス (caravan)

第2幕 ゼイヴィア・キャンディの家

第3幕 ヘスターの庭、のちに猫ヶ沼のトレーラー・ハウス

第1幕 第1場 明け方の猫ヶ沼。氷雪に覆われた銀世界を40歳のヘスター・スワン³⁾ (Hester Swane) がコクチョウ (black swan) の亡骸を引きずって登場。血の跡が雪に残る。その姿を背後から「亡霊愛好家」

(Ghost Fancier) が見つめる。〈クロバネ〉(Black Wing) と名づけた昔馴染みのコクチョウが昨夜、沼地で凍死し、下腹部から引き剥がしてきたこの遺骸をヘスターは埋葬するつもりでいる。コクチョウに関わりあうと危険だと諭す亡霊愛好家に、彼女は古い迷信だと一蹴する。愛好家は自分が探している亡霊が、他ならぬヘスター自身であると知って当惑し、明け方と夕方を間違えて早く来過ぎた、と詫びて立ち去る。娘がいるからいま死ぬわけにはいかない、とヘスターは呼びかける。

60歳代の隣人モニカ・マレイ (Monica Murray) が登場。(彼女の目には愛好家は見えない。) 変幻自在な沼が引き起こした目の錯覚であり、クロバネの死も寿命、それよりも氷点下5度以下の低温予報が出ているなかを歩き回ると風邪をひくよ、ヘスターに注意し、立ち退きを迫られている彼女に、自分の家に泊り、娘ジョウジー (Josie) のことをもっと慮るように諭す。しかし、ヘスターは激昂して、内縁の夫カーシジ・キルブライド (Carthage Kilbride) は永遠に自分のものであり、ティンカー風情と蔑まれ邪魔立てされようとも尻尾をまいて逃げたりはしない、自分とカーシジとの絆は情愛よりも堅固で、きしみあう2つの岩のようなもの、カーシジ抜きでは自分の人生は辻褄があわないのだ、と主張する。娘の目に触れぬうちにクロバネを埋葬するが、絶対にこの土地を立ち去りはしない、と言って退場。

第2場 7歳のジョウジー・キルブライド⁴⁾が寝間着姿のまま裸足で家から飛び出し、主題歌の「猫ヶ沼のほとりで」を歌う。防寒服を着込んだキルブライド夫人 (Mrs. Elsie Kilbride) が遅れて登場。彼女は「おばあちゃん」という親密な呼びかけを嫌い、丁寧な「おばあさん」と呼ばせようとする。霜焼けにならないように着替えなさい、と孫娘に命じて、両者は家に戻る。

第3場 トレーラー・ハウスの傍でヘスターがクロバネの墓穴を掘っている。「猫ヶ沼」の地名の由来でもあり、この沼沢地に住む50代後半の「猫女」(Catwoman) が登場。(人間であるのか、半妖怪なのか、テキストからは判然としない。) 猫の眼球や肢が埋め込まれた猫革のコートを着ており、盲目で、杖をついている。猫ヶ沼の所有者だと威張る猫女に、彼女が勝手に失敬したらしいガーデン・チェアを返さないと、猫女の泥炭の家を焼き討ちにする、とヘスターは脅す。毎晩、猫女の家を訪ねていたクロバネは昨夜、猫女に別れの挨拶に来たそうで、飛行中に絶命し、沼の水面に墜落する音が聞こえたのだという。ヘスターはクロバネを埋める。

猫女がポケットからネズミを取り出し、ミルクをねだるので、不潔で忌まわしいとヘスターは怒り出す。猫女はヘスター誕生のときにお産の手伝いをしたと恩を売り、昨夜ヘスターが黒い汽車になって沼地を爆走する夢を見た、この土地を離れた方が身のためだ、と予言する。さらには、なにか恐ろしい悪事を働いたのではないかと詰め寄る。ヘスターはその追及をやりすごし、自分の母親——娘と同じジョウジー——についての話を聞きたがる。ヘスター自身が記憶している母親の姿は、葉巻を吸う際の独特の癖(伸ばした手に持つ葉巻の方へ口を寄せていく)にみられる、くつろぎの様子であった。猫女は、ヘスターの母親が歌を紡ぐ名手であったが、生まれたばかりのヘスターをクロバネの巣のなかに3日も続けて置き、この子の寿命はクロバネと同じだ、と言ってのけたのを機に、反感を募らせたのだと語る。ヘスターはこの話を信じないが、猫女は自分の予言がことごとく的中した例——ヘスターが一人娘しか授からないことやその娘の出生の日時、モニカの一

人息子の交通事故死、ゼイヴィア・キャンディの妻が特効薬の薬草を処方されなかったため命を落としたこと——を引き合いに出し、猫ヶ沼を離れるように諫めるが、ヘスターは応じない。

第4場 ジョウジーと祖母のキルブライド夫人が庭のテーブルでトランプの〈スナップ遊び〉をしている。夫人は大人気なく勝ちにこだわり、5連勝を勝ち誇る。負けるのはおつむが弱いからであり、自分が7歳の頃には料理や農作業を一人前にこなしていたと自慢し、背筋をしゃんと伸ばすよう、「おばあさん」と呼ぶように、孫娘に言い聞かせる。自分の名前の綴り字を問われたジョウジーが「ジョウジー・キルブライド」を正確に綴ると、お前はキルブライド家の一員ではない、と苛める。彼女は、息子がティンカー女のヘスターにたぶらかされたことが我慢ならないのだ。息子の施しを酒や葉巻に無駄遣いする性悪女と違って、夫人はこつこつと貯蓄に励み、いまや3,000ポンド(60万円相当)もの蓄えがあることを孫娘相手に吹聴する。そのうちの1,000ポンドは自分の葬儀費用、1,000ポンドは宗教団体への寄付、1,000ポンドは息子への遺産で、ヘスターに奪われるから孫娘にはびた一文遺さないのだ、という。しかし、これほど儉約に励んでも誰からも褒めて貰えない、と愚痴をこぼし、今度は孫娘が不憫になったのか、お菓子をあげるからキスしなさい、とか、トランプで負けてあげるからもう一番とか、孫娘におもねる始末。

そこへ息子のカーシジが登場。ジョウジーに構わないように繰り返して、夫人を追い払う。娘が表裏逆に着ていたジャンパーを直してやるカーシジ。初聖体拝領の折のドレス⁹⁾ ([First] Communion dress) を着て父親の結婚式に出席したがる娘を連れて、カーシジは飼っている仔牛の様子を見に行く。

第5場 20歳のキャロライン・キャンディ (Caroline Cassidy) が花嫁姿で、ヘスターの家の窓辺に行き、声をかける。ヘスターは彼女の背後から現れる。今週中に立ち退きの契約書を交わしていながらヘスターが依然として居座っていることにキャロラインは驚くが、ヘスターは書類の無効を訴え、カーシジをひとかどの男に仕立て上げたのは自分であり、絶対に彼は渡さない、と断言する。思い余ったキャロラインは、亡き母親の遺産である19,000ポンド(380万円相当)の金をあげてもいいから、人生で最高の日であるべき婚礼の日を台無しにしないでほしい、と涙ぐむ。しかし、その母親の死後、父親が留守のときなどにキャロラインに添い寝して子守りをしてやったこともあるヘスターは、情愛にあふれるまともな自分と、キャロラインを平然と刃物で切り刻みかねない自分の、二重人格がわが身に共存しており、16歳の少年の頃から暮らしてきたカーシジを奪われてなるものか、とキャロラインの髪を乱暴につかんで、敵意を剥きだしにする。

第6場 庭のテーブルに座り、ヘスターは葉巻に火をつける。娘のジョウジーが祖母のショールとハイ・ヒールを借用して、祖母のフリをする。いわく、砂糖や小麦粉も切り詰め、お茶代わりに靴下の煮込み汁を飲み、泥炭シチューにカタツムリ・タルト、おしっこジュースをデザートにして、一夜にして1,700万ポンド(34億円相当)のお金を貯めこみました…。面白がって応じていたヘスターだが、歯磨きはなんのために毎日するの、と訊かれて、微笑みが効かないときに歯を剥き出しにしてどなりつけるためよ、と答える。

婚礼衣装のカーシジが登場。ヘスターはジョウジーを別の場所に行かせる。二人きりになると、激しいやりとりが交わされる。もう俺は16歳の青二才ではない、とカーシジは居直り、ヘスターはカーシジの方から誘っておいて、甘い汁をしゃぶり尽くして用済みの骨のように捨てられるのは我慢ならない、と反論。自分が40歳

の年増女になったからでも酒に溺れたことがあるからでもないのなら、なんとか元の鞆かぶとに戻れるように努力する、キャロラインの父親に馬車馬のように農場で働かせられるのが落ちだ、と懸命に翻意を迫るが、通じない。生まれ故郷の猫ヶ沼で人生を終える権利が自分にはあるし、ティンカーの血筋をむしろ誇りとするヘスターだが、飲酒癖や夜間徘徊癖、放浪生活などを理由に母親の親権を剥奪することも可能であり、ヘスターには提供できない人生のチャンスを娘に与えたいのだ、とカーシジ。彼は封筒に入れた「殺人手数料」をヘスターに放り投げ、自分には安らぎが必要で、夕方までに必ず立ち去るよう、言い残して去る。

ジョウジーが一人遊びから戻って来る。ひとりになりたいヘスターはつい、娘に「ジョウジー・スワン」と無意識のうちに呼びかけ、自分でも気がつかないのを娘に指摘される。

キャロラインが父親ゼイヴィア (Xavier Cassidy) を伴って登場。彼女の花嫁衣裳に触れようとするジョウジーをヘスターは乱暴に抱き上げ、裏手で遊んでいるように命じる。ヘスターは挑戦的にウィスキーを飲みだし、半年前に不本意のまま署名した立ち退き承諾書の撤回を主張し、既に受け取った補償金の一部返済として、さきほどカーシジが放り投げた封筒を押しつける。

ゼイヴィアはヘスターの母親の話を持ち出す。星空に向かって意味不明の言葉で歌を口ずさみ、酒を奢ってくれる男なら誰とでも飲み歩き、その情夫に視線を投げただけで鼻を食いちぎられた女もいたほど、嫉妬深く獰猛だったという。その間、赤ん坊のヘスターは汚いおむつのまま、トレーラーのドアに鎖で縛りつけられて放置され、見かねたゼイヴィアが食事や金を恵んでやったり、実家で預かって世話を焼いたが、次第に引取りにも来なくなったのだという。

ヘスターは、そうした話は嘘っぱちであり、自分は私生児ではない、父親はジャック・スワン (Jack Swane of Bergit's Island) という男で、最期には自分を実子と認知してくれた、と抗弁する。ゼイヴィアは、現金の封筒をヘスターに突っ返し、キャロラインの幸福のために今日中に立ち去るよう指示して、親子は退場。

初聖体拝領のドレスに着替えたジョウジーが登場。娘の瞳を見て、ヘスターは母親の瞳に似ていると伝える。ヘスターがちょうどジョウジーの年頃だった、ある夏の夜、同じように初聖体拝領ドレス姿のヘスターに向かって母親は、ちょっと沼を散歩してくる、と言い残したまま出て行き、それっきり戻ってこない…。だから、ここで母の帰りを待ちつづけるのだ、と呟く。(暗転)

第2幕 ゼイヴィア・キャシディの家。結婚披露宴の長いテーブルの中央で、猫女が皿に注いだワインをぺちぺちと舐めている。ウェイター役のダン青年 (Young Dunne) と猫女は言葉を交わし、将来、宇宙飛行士になりたい、と青年は夢を語る。

ウェイターと入れ替わりに、ジョウゼフ (Joseph Swane) の亡霊が登場。血まみれのズボンとシャツ、喉に傷がある。(盲目の猫女は勿論のこと、ジョウゼフの方も猫女の姿は見え、声だけが聞こえるらしい。) 18歳で亡くなったジョウゼフは、生まれ直して、肉を食べたり鮭を釣ったりの日常生活に戻りたい、と訴える。それは叶わぬ願い、と猫女は答え、姉ヘスターの家へと亡霊を道案内すべく、退場。

キャロラインとカーシジの新郎新婦が登場。ヘスターの存在を心配するキャロラインに、十分な手切れ金は渡したし、できれば娘ジョウジーを手元に引き取って育てたい意思を告げる。しかし、ヘスターとカーシジの

過ごした長い歳月の重みを考えると、自分の結婚の決断が本当に正しかったのか、不安に駆られるキャロライン。

キルブライド夫人が登場。無神経にも新婦顔負けの、全身白づくめの花嫁衣裳のような装いである。新郎新婦を写真撮影した後、自分の履いている靴を新品のうちにと記念撮影を始める。半年前から節約して購入した代物で、150ポンド（3万円相当）もしたと自慢する。

ゼイヴィアとモニカ（ジョウジーを連れている）が登場。すでに執り行われた祭壇での挙式の際に、死んだ息子のブライアン（Brian）を思い出した、とモニカが語るのに対し、ゼイヴィアの方は、死んだ息子ジェームズ（James）のことなど自分は思い出さないし、亡妻オリヴ（Olive）は自分への怨みから死んだのだ、と平然と言い放つ。

猫女と80歳のウィロウ神父（Father Willow）が、ともに杖をついて登場。神父はシャツの下から寝間着が覗き、手には嗅ぎ煙草。キルブライド夫人は、不潔な猫女を宴席に招待したことや神父の毫碌加減を嘆くが、猫女を招かないのは不吉な行いだから、とゼイヴィア。カーシジは猫女に予言をせがみ、「別々の墓石」が見える、と縁起でもない答えを貰う。ジョウジーは父親と二人きりの記念撮影をキャロラインに頼み、叶えてもらう。

やがて全員がテーブルに着席し、新婦の父親ゼイヴィアが愛娘を嫁がせる立場から謙虚な挨拶をする。キルブライド夫人もここぞとばかりに立ち上がり、カーシジがいかに母親思いのいい息子であるかを自慢し、子ども時代に3本の木の十字架でキリストの磔の故事を再現したエピソードなどを長々と持ち出して、挨拶を返す。乾杯のあと、主への感謝の祈りを唱えるように皆から求められたウィロウ神父は、かつての恋人（名前もすぐには思い出せない）とアヒルの卵をめぐって喧嘩別れしたために、自分は婚期を逃した、といった呆けた話に終始する。

ヘスターが、花嫁姿で登場する。9年近く前（ジョウジー懐妊の時期）、結婚を申し込んだカーシジから贈られた衣装で、一度も日の目を見ていなかったものである。息子をたぶらかされたと思っているキルブライド夫人は激しくヘスターを罵倒する。ヘスターは打ち捨てられる惨めさを訴え、よりを戻してほしい、と必死にカーシジに哀願するが、カーシジは取り合わない。ヘスターは、母親の帰りを待つため、猫ヶ沼を離れるわけにはいかない、と譲らず、現金の入った封筒（1幕6場）をカーシジに放りつける。母親がいてくれたらこんな事態にはならなかったのに、と涙ぐむヘスター。彼女と一緒に帰ろうとするジョウジーをカーシジは引き止める。ヘスターは瓶ワインをつかみ、あとで必ず迎えに来るわ、と娘に伝え、憤激に駆られた宣戦布告をして、退場する。

第3幕 夕暮れ時。ヘスターの花嫁衣裳は黒く焦げ、泥で汚れている。ヘスターの家と40頭の仔牛が繋がれた家畜小屋はめらめらと燃え上がり、その炎のなかにジョウゼフの亡霊が佇んでいる。ジョウゼフが「猫ヶ沼のほとり」を口ずさむのがヘスターの耳に届く。（両者は互いに姿が見えないが、声は聞こえる。）ヘスターは弟の亡霊に、殺害の謝罪を求めているのなら応じない、もし生きていたら同じように喉首を掻き切つたらう、と開き直る。「猫ヶ沼のほとり」は母親が自分のためだけに作ってくれた歌だと信じていたヘスターは、

弟にも歌ってやっていたと知って、母親をなじり、もし母親に会えたら、なぜ自分を捨てて失踪したのかを知りたい、と訴える。

以後の二人のやりとりから分かることは、ジョウゼフはヘスターによって船の上で殺害されたこと、共犯のカーシジは単に見張りや死体遺棄を手伝っただけであること、殺害動機は、金銭目当てではなく、自分が私生児とみなされているのに対して、ジョウゼフは正式に認知され、しかも母親の名前ジョウジーに因むジョウゼフを与えられるほど可愛がられ、自分だけが爪弾きにされて、母親が父親とジョウゼフの3人家族で睦まじく暮らしていると想像した時の、胸を突き刺されるような嫉妬と憎悪であったようだ。ヘスター出産時、心臓疾患による死産だったと母親は夫に嘘をついており、娘の生存をあとで知った父親ジャックは、遺産を姉弟で分けるように遺言して亡くなった。姉と分配しようと遺産を持ち帰った船の上で、ジョウゼフは実姉の手で殺されてしまった訳である。ジョウゼフは、ふたたび当^どて所なく彷徨うべく、姿を消す。

トレーラーハウスの階段に座り、ワインと葉巻を始めたヘスターのもとへ、モニカがあわてて火事を知らせに来る。ヘスターの放火と知って、彼女の身の安全を気遣うが、ヘスターは泰然自若としてワインを勧める。

モニカが語るヘスターの母親の思い出と言え、黒髪の大きな頭、猫のような瞳、節くれた長い腕と首を白鳥のように伸ばす欠伸、冠婚葬祭の儀式には必ず呼ばれて歌を歌っていたが、気に入られていた訳ではなく、招かないと不吉とされていたからだという。ヘスターも母親に同伴した席で、施し物はくれるものの、盗みを怖れて座敷へはけっして上げない人々のつれなさをいまだに痛切に覚えている、と語る。待てど来ぬ人を待つのは見戯に等しい、とモニカは諭すが、授産学校 (Industrial School⁷⁾) に入所していたときに、必ず猫ヶ沼に戻って母親を待ちつけようと誓ったのだ、と譲らない。モニカは再び披露宴の席へと戻っていく。

ジョウジーが駆けて来る。父とキャロラインの5日間の新婚旅行に連れて行って貰えると大はしゃぎするが、ヘスターは反対する。母も (内縁の) 夫も娘までも自分から去っていく、と嘆き、猫女とクロバネの呪いで、母さんから離れると死んでしまうのよ、と娘に嘘をつく。一緒にいたいのはお母さんよ、との娘の台詞に、呪いの話は嘘だと詫げるヘスター。披露宴に戻って踊りたがる娘の手をとって、「猫ヶ沼のほとりで」の曲に合わせて、母娘は踊りだす。ジョウジーは持ってきた披露宴のケーキを母親に渡し、30分だけの許可を得て、披露宴へと戻っていく。

銃を抱えて、赤ら顔のゼイヴィアが登場。ヘスターによる放火に激怒するが、土地話を餌にカーシジを丸め込んだ彼の悪辣な手口をヘスターは非難し、ゼイヴィアの虚弱な息子ジェームズの不慮の死に関する疑惑を指摘する。ジェームズの飼犬はストリキニーネ (中枢神経興奮剤) を大量に処方され、犬を探しに出たジェームズも薬物の犠牲になったのではないかと、ゼイヴィアによる子殺しの嫌疑である。ゼイヴィアはこれを否定し、ヘスターの母親をふしだらな「5シリングの売女^{ばいた}」呼ばわりするが、何を言われても、自分のなかの母親像は揺るがない、とヘスターは反論する。ゼイヴィアは銃をヘスターの喉元に押し当て、セクハラ気味に立ち退きを迫るが、気丈にもヘスターは銃身を口にくわえて、撃つなら撃つがいい、と威嚇し、引き金に自ら指を伸ばす。もみ合いの末、ゼイヴィアはヘスターを振りほどく。ヘスターは、今日この土地を、思いも

よらぬやり方で立ち去る、と意味深長な台詞を吐く。

カーシジが、家畜を焼死させられたのを激怒しながら登場。ジョウジーを引き取り、ジョウゼフ殺しの件も暴露する、と息巻くが、ヘスターはゼイヴィアのセクハラ行為を非難し、娘をこんな祖父のもとに任せられない、と反論。それを聞いたカーシジは、ゼイヴィアへの怒りを爆発させ、両者は喧嘩別れする。ヘスターは最後の願いとして、ジョウジーとともにトレーラー・ハウス生活を猫ヶ沼で続けたいと懇願し、弟殺し幫助の件は必ず秘匿する(湖に投棄した時点ではジョウゼフはまだ息があったのに、絶命した、と偽った、と初めて明かす)、と約束する。〈裁く〉のではなく、じっと目を見て〈理解して〉くれていれば、孤独な徘徊や飲酒もしなかった、誰よりも自分が自分を一番厳しく裁いている、とヘスター。しかし、法的手段に訴えてでもジョウジーの親権を得る、とカーシジは宣言する。

キャロラインがヘスターへのワインを持って登場。ジョウジーにはいつも付き添って優しく接すること、今日の婚礼の主役は本来、ヘスターであるべきだった、と感じているし、まるで他人事のような気がした喧騒行事は、病身の母親とともに思い描いていた理想の婚礼とは程遠いものだった、と真情を吐露する。自分も親子3人の幸せな家庭を築いて、母親がいなくても立派にやれることを母親に見せられれば母親を赦すことができる、と信じていたが、結局うまくいかなかった、とヘスター。親権の異動に反対すると頑張るキャロラインを、脆く無力な存在のように憐れんだヘスターは、やさしく彼女を帰らせる。

ひとりになったヘスターは、トレーラー・ハウスからナイフを持ち出す。自分の喉に当てて自害を図ろうとした瞬間に、ジョウジーが駆けて来る。新婚旅行同伴の別れのキスをする娘に、自分もまた二度と戻れない場所に行くから、と告げる。それなら一緒に母さんについていく、と抱きついてせがむ娘に、自分のように、来ぬ人を待ち続ける一生を送らせたくない、と考えたヘスターは、娘に固く眼をつぶらせ、彼女の喉首を一気に掻き切る。ジョウジーは母の腕の中で息絶える。

ヘスターの洩らす、恐ろしい獣のような嗚咽を聞きつけて、猫女が登場。ジョウジー殺害を知って、大声で助けを呼ぶ。カーシジ、モニカが駆けつける。自分の帰りを夢見て一生を浪費し、邪悪な母親像を吹き込まされたくなかったから、とヘスター。

亡霊愛好家が登場。(彼の姿はヘスターにしか見えない。)ほとぼりが冷めたころ、猫ヶ沼を歩くと感じる微風やかすかな音が自分と娘だ、と言い残して、ヘスターは亡霊愛好家とともに〈死の舞踏〉を舞い、最後にナイフが彼女の胸に突き刺さる。亡霊愛好家はナイフを抜いて、退場。母さん、と呟いてヘスターは絶命する。しばらくして、モニカが遺体のもとに近づき、ヘスターが自ら抉り出した心臓が、黒い羽の鳥のように胸に置かれていた、と語る。音楽と照明。

(III) 『猫ヶ沼のほとりで』の主題の考察

(1) 沼沢地 (bog) の象徴性

アイルランド島の7分の1⁸⁾を占めるのは「ボグ」(bog)と呼ばれる沼沢地の地層である。とりわけアイルランド中央平地にはこのボグが広がり、作品の舞台である

オファリー州は、耕作可能地よりも沼地の面積の方が広いとされ、泥炭として圧縮加工する冷却塔が建ち並んでいるという⁹⁾。作物を作るのには適さない沼地だが、人間の原初の記憶、原風景のようなものを喚起させる場所でもある。

地理学上の分類では、bogは大きく2つのタイプ——毛布型泥炭地 (blanket bog) と隆起湿原 (raised bog) ——に分けられる。前者は丘陵地や穏やかな山の斜面などの比較的平坦な地域を広く覆い、強酸性で貧栄養の泥炭地であり、後者は内陸部などのいっそう平坦な土地にみられ、ミズゴケなどの湿地性植物が酸性水のなかで繁殖し、ときには12mもの高さまで凸状に隆起した湿原である。乾燥すれば、前者と違い、耕作に適した肥沃な農地にもなりうる¹⁰⁾。この定義から判断すれば、中央平地にあるとされる「猫ヶ沼」は、比較的植生に富む、隆起湿原タイプに属すると思われる。

5歳からアイルランド西部ケリー州で育った女性詩人ヌーラ・ニー・ゴーノル (Nuala Ni Dhomnaill, 1952-) の詩でも、この沼地がうたわれている。

沼の底には^{こだいぼく}古代木 埋もれた木の松
 鏑を知らぬ^{つるぎ}剣をかたわらに フィアンナ戦士団が
 骨となって眠る そして 少女がひとり
 首には縄の輪 溺れ沈んでいる (「流砂」第2連¹¹⁾)

アイルランド中央低地 小さな町々を通り越し (中略)
 山の裂け目を過ぎ 沼地と 湿った牧草の丘を越え (「まっしぐら」第1・3連¹²⁾)

わたしは恋する ^{ボツグ}泥炭地 ひんやりした粘土
 わたしと愛しいあなたのため 泥土が蓄えてくれるものに (「恋する」第1連¹³⁾)

1931年から32年ごろ、ダブリン近郊のキルデア州の田舎で行われた、夏の沼地祭りの模様を描いた以下の一節にも、沼沢地の不気味さが語られている。

「こんなに大勢の人間が、沼地に集まるときが来るなんて、思ってみたことあったかい。」いいえ、決して。沼地なんて、だれも見向きもしなかった。絶対に、決して。沼地なんて、いつも、キリスト教徒にとっては、恐ろしい闇に包まれた場所だと考えられていた。まして、上流社会なんか、問題にもしなかったところだ¹⁴⁾。

ヘスターが猫ヶ沼を離れようとしなないのは、第一には母親が帰還するはずの故郷で

あるからだが、「沼の9平方マイルにわたって、塚や小川や窪地はみんな知っている。最高のヒメシヤクナゲ (bog rosemary) や、もっともかぐわしい野生のヘンルーダ (bog rue) が生えている場所も知っている。眠っていても、猫ヶ沼を案内してあげられるほど」(225)、彼女がこの土地の自然を知悉しているからでもある。

カーの母校UCD付属の演劇研究センターで講師を務めるキャシー・リーニー (Cathy Leeney) は、「猫ヶ沼という場所は、〈リンボ〉 (limbo)、この作品では、冷たくて白く、亡霊が出没し、どっちつかずと見なされる〈リンボ〉の比喻として、機能している」¹⁵⁾と述べている。

〈リンボ〉は、「地獄と天国との間にあり、キリスト教に接する機会がなかった善人、または洗礼を受けなかった小児などの霊魂がとどまる、地獄の辺土」を指すカトリック用語と、そこから転じて「忘れ去られたものの行き着く場所、忘却の淵、中間の地域や状態、不確実な状態」の両義があり(『リーダーズ英和辞典 第2版』)、おそらくリーニーは前者の宗教的意味で用いていると思われる。猫ヶ沼を夜な夜な、さすらうヘスターは、母親を待ち続ける宙ぶらりんの状態に置かれ、その魂は、この世にいるともあの世にいるとも分からぬ、あるいは、地獄にいるとも天国にいるとも分からぬ、母を求めて苦悩しており、さながら〈リンボ〉を彷徨している印象を与える、という示唆であろう。沼地は、ヘスターの心の拠り所であると同時に、不安定な精神状態を映し出す象徴でもある。

(2) 白鳥伝説をめぐって

(ア) 白鳥の象徴性

ヘスターの姓である「Swaneは、swanを意味する」(199)ように、白鳥の持つ象徴性もまた、この劇に深く関わっている。ケルトの文献では、他界の人物たちの大部分がこの地上の世界に侵入する際に化身するのが白鳥であり、白鳥は「自己を解放し、至高の原理へと戻っていく〈存在の崇高、ないしは天使の状態〉を象徴する」¹⁶⁾とされる。白鳥の名を担うヘスターは、その意味では異界からの使者として、やがて異界へと舞い戻る運命にあることが暗示されている。

白鳥に関するアイルランドの伝承物語でもっとも知られているのは、「リア王の子どもたち」の物語¹⁷⁾であろう。以下に、粗筋を略述しよう。

リア王 (King Lir) には4人の子ども (3男1女) がいたが、后を亡くしたのち、子どもたちのためにイーファ (Aoife) という女性と再婚する。ところがイーファは子どもたちを疎んじ、ドルイド僧の魔法の杖の力で子どもたちを白鳥に変身させて

しまう。以後300年は近郊の湖上で、次の300年は（アイルランドとスコットランドの間にある）モイルの海（Sea of Moyle）で、もう300年はグローラ島（Isle of Glora）で白鳥のまま生きる呪いがかけられており、これを解くのは教会の鐘の音だけだという。白鳥になった子どもたちからことの経緯を知ったりア王はイーファに呪いを解くように迫るが、拒絶された王はイーファを追放する。誰も白鳥を元の子どもたちに戻す術を知らず、国王はやがて失意のうちに他界する。4羽の白鳥は前述した辛い900年間を過ごし、あるとき教会の鐘の音を耳にする。Caomhógという名の老人が白鳥たちから顛末を聞き、聖水をふりかけると、白鳥はいまや900歳の老齢と化した人間の姿を取り戻す。神の恩寵を語る老人の言葉に安心して、4人は息を引き取る。彼らの亡骸は埋葬され、老人はその晩、4羽の白鳥が天国をめざして空を飛んでいる夢を見る。

この中世の伝承や、人間に近いとされる白鳥の鳴き声のせいで、〈白鳥＝人間〉というイメージが定着し、「白鳥は決して殺してはならない」¹⁸⁾とされている。

オスカー・ワイルドの父親が著わした『アイルランド民間迷信集』によれば、このほかにも、『グレンダロッホの書』（Book of Glendalough）の「アイルランドの驚異」の章に、〈白鳥＝人間〉の物語が見出される。それによれば、Mac Coiseという詩人が、ある日ボイン川で白鳥の群れを見つけ、石を投げたところ1羽に命中した。捕まえにいくとその白鳥は人間の女に変身しており、事情を聞くと、病気のときに悪魔（demons）に誘拐されたのです、と打ち明ける。詩人は彼女を無事にもとの故郷に帰してやったという¹⁹⁾。

(イ) コクチョウの象徴性

しかしながら、『猫ヶ沼のほとり』に登場する鳥は、純白のハクチョウではなく、black swan、コクチョウ²⁰⁾である。コクチョウの亡骸を埋めるべく、ヘスターが雪上を引きずっていく印象的な場面から劇は始まる。新生児のヘスターがほとんど遺棄にも近い形で委ねられたのはコクチョウの巣であり、彼女の抉り出された真っ黒な心臓はコクチョウを髣髴とさせた。それでは、白鳥ではなく、コクチョウを選んだことに何か深い意味があるのだろうか。

上村くには『白鳥のシンボリズム』のなかで、コクチョウについて以下のように記している。

オーストラリア大陸の発見・開発を通じて、黒鳥の存在がヨーロッパに知られた

のは1698年であるという。「黒い白鳥」ということで、見世物になったり公園の池に放たれたりして、大いに珍らしがられたという。ところがバシュラールは『大地と休息の夢想』の中で、「白い白鳥が実はまっ黒いということは中世ではあたり前の真実で、千年余にわたって信じられてきた」というラングロワの言葉を引用している。たしかに中世にはサタンを表す紋章として、魚をくちばしにくわえて水面を走る黒鳥がみられる。白鳥はキリストであると同時にサタンなのだ²¹⁾。

また、「古代ギリシア人がまっ黒い白鳥グライアイを想像していた」ように、

ヨーロッパ人もまた、実際の黒鳥を見る以前から、想像の力で黒鳥の存在を知っていたのである。これは想像力が事実の先を越すこともあるという好例であろう。まっ白い白鳥の中に漆黒の黒鳥を見る人間の眼力は、時間、空間を問わず普遍的なものであるらしい。白鳥がもてはやされた世紀末はまた、その対である黒鳥の時代でもあった。モリエは世紀末の黒鳥は「深淵を流れる原初の水」すなわち「宇宙の母胎」を象徴していると書いた。黒鳥は白鳥が象徴する無意識のうちの最も暗く秘密の部分の暗示しているといえるだろう²²⁾。

上記の引用に見える「深淵を流れる原初の水」が猫ヶ沼の沼沢地に淀んでいるとすれば、その沼地にもっともふさわしいのは、やはり「無意識の最も暗く秘密の部分」を暗示するコクチョウをおいて他にはないだろう。

(3) ティンカーへの偏見

この劇で特徴的な設定は、主人公のヘスターが「ティンカー」(tinker)と呼ばれる非定住者に属し、いまでこそ家屋をあてがわれてはいるものの、やはりトレーラー・ハウス生活を理想とし、一般の定住者との社会的文化的摩擦を引き起こしていることにある。

アイルランド政府やマス・メディアが使用する公式呼称は「アイティネラント(遍歴者)」(itinerant)であるが、この集団に属する人々は自らを「トラヴェラー」(traveler)ないし「トラヴェリング・ピープル」(traveling people)と名乗っている²³⁾。

『猫ヶ沼のほとりで』においては、ヘスター本人も周囲の者も「ティンカー(鋳掛け屋)」という伝統的な言葉を用いている。たしかに鋳掛け屋(ブリキ職人、板金工)稼業のみが非定住者たちの生業ではないし、プラスチック製品が普及した現在、ブリキ製品修理や特注の需要はほとんどなく、生活資金の調達はリサイクル業が主流にな

っているという。伝統的な「ティンカー」という呼称にこびりついた侮蔑のニュアンスを嗅ぎ取り、毛嫌いする人々もいるという。

しかしながら、ヘスターは「私のティンカーの血統について言えば、私は誇りに思っている。ここいらにいるあんたらに勝ち目を与えてくれるし、あんたらが生まれつきの下品で沼のような脳味噌の連中であることを分からせてくれるからね」(209)と、用語のニュアンスにはこだわらず、自らの存在価値や独特なライフスタイルに誇りを表明している。

もちろん、ヘスター以外の者が使う場合には、「ティンカー」という語は蔑視語として機能していることが多い。「とっくの昔にお前さんの器量は見抜いていたさ。怠け者で不甲斐ない血が体を流れ、例の獰猛なティンカーの視線をみんなに投げて怖がらせー」(224)と、キルブライド夫人は彼らの怠惰な性格や動物的な眼光に嫌悪を示し、ゼイヴィアもまた、ヘスターが「わしの娘だったらそのティンカーの舌を切り落として、唇に焼きごてをあててやる」(238)と息巻いている。自宅放火の暴挙を目前にしては、親切な隣人のモニカですら、「それがティンカーたちの流儀だわね、後に残すものはみんな焼き払うのが？」(231)と啞然としている。

しかしながら、ティンカーを激しく蔑むキルブライド夫人の家系も、実際にはティンカーと同様な職種の間人であったことが次のやりとりから暴露される。

キルブライド夫人 ティンカーにチャンスなんかやっても時間の無駄よ。ティンカーが理解しているのは、通っていい道路と次なる瓶入りウィスキーの調達先だけなんだから。

モニカ それでもって、あんたは当然わかってるでしょうけど、あんたのじいさんもそのひとりだったでしょうに。

キルブライド夫人 わたしの祖父は巡回のブリキ屋 (a wanderin' tinsmith) だったわ。

モニカ つまり、日用雑貨品を備えたティンカー (鋳掛け屋) 以外の何者だって言うのよ！ (And what's that but a tinker with notions!)

[226]

キルブライド夫人が強弁する「巡回ブリキ商」は、「ティンカー」の定義に限りなく肉薄する職種である。夫人の息子カーシジについてヘスターが、(キャロラインが)「挨拶すらろくに交わそうという気にはなれないような肉体労働者の息子」(205) だったと指摘する箇所もある。夫人やカーシジは現在、たしかに定住生活を営み、トレーラ

一・ハウスでは暮らしていないかも知れないが、ある集団の指標が特定の職種であるとするれば、夫人たちも「ティンカー」の一員であるか、少なくとも二代前に遡ればそうであったと見なしてよいと思われる。つまり、定住者と「ティンカー」は、民族的・宗教的に同質であり、「ティンカー」は定住アイルランド人の子孫であることを見落としてはならないだろう。

こうした「ティンカー」、あるいは「トラヴェラー」と呼ばれる人々は、こんにちアイルランド全土に25,000人から30,000人の規模で存在し、一般定住者たちから差別を受け、貧困と不衛生な生活環境に置かれている。皮膚の色や人種は同じであることから、従来「人種差別」という概念はなじまないとされていたが、概念を拡張して、積極的に非定住者への人種差別問題に取り組む試みがなされつつあるという²⁴⁾。

放浪生活という社会的適応力のなさ、責任や労働に束縛されない特異なライフスタイルに対して、「自分たちの不運やフラストレーションをぶつけることができる劣位のグループとして、スケープゴートを必要」²⁵⁾としていた定住者たちにとっては、「ティンカー」がその不満の捌け口、恰好の攻撃対象となった側面も大きいと思われる。

アイルランドのティンカーと同様に、わが国でも定住生活を送らず、漂泊の暮らしを続ける集団がいて、「サンカ」(山窩)と呼ばれている。江戸期以前から西日本の一部で日常的に使われていた用語と、犯罪者集団あるいはその予備軍を指す警察部内の隠語、民俗学の研究者の専門用語など、いくつかの意味や用法が重複している言葉とされる。この「サンカ」たちが従事していた生業は、主に箕、竹細工、川魚漁の3つとされ、ティンカーの鋳掛け屋とは異なっている。しかし、サンカの置かれた社会的立場や定住者たちからの偏見などは、ティンカーを理解する上で参考になるものと思われる。

(4) ギリシア演劇との関連

テキストに添えられた解説頁で、編者のスターンリヒト教授は、『猫ヶ沼のほとりで』に見えるギリシア悲劇の影響を以下のように4点、指摘している²⁶⁾。

- ① 預言の存在——預言を伝える役割を果たすのは、鳥、亡霊愛好家、猫女
古代ギリシア演劇では、観客が劇の主人公の運命を予め知らされるのが劇作の慣例であり、『猫ヶ沼のほとりで』でも亡霊愛好家が冒頭でヘスターの運命を暗示し、コクチョウや猫女もその役割を果たしている。
- ② 『メディーア』との類似——ヘスターはアイルランド農民版のメディーアである
- ③ 『アンティゴネ』との類似——新婦の父親キャシディは、この作品のクレオンに

相当する

④ 時の一致原則に従って、1日のうちに戯曲が終わる

このうち、とくに②の、エウリピデス(Euripides, ca.480-406 B.C.)やセネカ(Lucius Annaeus Seneca, ca.4 B.C.-A.D. 65)の悲劇『メディーア』との主題の類似は、誰の目にも明らかだろう。夫の立身出世の手助けをし、実の弟を殺してまでして勝ち得た夫の情愛を、無慈悲にも失ってしまう妻が、最後にはわが子までも殺める、という基本的なプロットは共通している。

『メディーア』では、黄金の羊毛(Golden Fleece)を得ようとするアルゴ船隊(Argonauts)を魔力で援助し、弟アプシュルトス(Absyrtus)を八つ裂きにして投げ捨てて逃避行したにも関わらず、夫イアソン(Jason)は魔女メディーアを裏切り、コリント王クレオンの娘クレウサ(Creusa)と結婚する。メディーアは、実の子ども2人(男の子)を殺すことによって、裏切った夫への復讐を遂げる。

『猫ヶ沼のほとりで』は、無一物で役立たずの境遇から脱出させ、弟ジョウゼフを殺してその金を貢いだにもかかわらず、ヘスターの内縁の夫カーシジは地元の富農の娘キャロラインと結婚し、絶望したヘスターは一人娘ジョウジーを殺している。

しかしながら、子どもの性別と人数の違いもさることながら、ヘスターは娘の喉首を掻き切って殺したあと、みずからも胸にナイフを刺して自害する。メディーアが復讐の対象として理不尽にも子どもたちを選んだことが劇の冒頭から語られるのに対して、ヘスターによる子殺しは、終盤になって予感が高まるものの、前半部分ではどうも想像しがたく、総じて、大方の観客の予想を裏切る衝撃的な行為である。

言い換えれば、ヘスターは、メディーアのように夫への歪んだ形での復讐としてジョウジーを殺したのではなく、後追いする不憫なわが子を死後の世界へと連れて行こうとする、母子無理心中の性格の方が強い。

さらに、メディーアは子殺しに先立ち、贈り物の黄金の冠と衣服(打掛け)に仕込んだ毒薬でクレオン王と王女クレウサまで殺害し、事前に確保しておいた逃亡先のアテネへ逃げこみ、その後故郷へ戻ったとされる。つまり、メディーアには死に至る病(=絶望)の影はなく、生への強い執着が窺える。

他方、ヘスターはゼイヴィアやキャロラインを殺そうとはしないし、復讐を果たしたのち異国へ高飛びする訳でもない。メディーアにとっては現在のコリントスの地は自分の故郷ではないが、ヘスターにとっては猫ヶ沼こそが生まれ故郷であり、彼女は土地とともに生きている。これらは、類似が指摘される『メディーア』との重要な相違点であり、カーは『メディーア』を下敷きにしつつも、彼女なりの独創的な劇世界

を構築している。英文学史では、ガウアー (John Gower) の長詩『恋人の告白』 (*Confessio Amantis*, ca.1393) や、チョーサー (Geoffrey Chaucer, ca.1343-1400) の『善女列伝』 (*The Legend of Good Women*, 1385-6) などでメディーアは取り上げられているが、本作によってカーによる新解釈のメディーア像が開拓されたといえよう。

③のソポクレス (Sophocles, ca.496-406 B.C.) の『アンティゴーン』 (*Antigone*) との類似に関して言えば、クレオン王とゼイヴィアの比較よりも、むしろ兄ポリュネイケス (Polynices) の葬礼を禁を犯しても実行に移すアンティゴーンの姿と、迷信をもとせず、クロバネの埋葬を粛々と行うヘスターの相似を筆者は強く感じた。

④は、いわゆる「三一致の法則」の一つである。三一致 (Unities) とは、「時の一致」「場所の一致」「筋 (アクション) の一致」、すなわち、劇が同じ一日のうちに、同一の場所で、単一の行為 (筋) で完結することを目指すものである。

アリストテレス (Aristotle, 384-322 B.C.) の『詩学』はしばしば三一致の法則の典拠として引用されるが、そこではそれほど強調されているわけではない。アリストテレスは、主としてアクションの統一に関心があった²⁷⁾とされる。いずれにせよ、この法則を遵守した芝居は、簡潔さ、強烈さ、形式の迫力が得られると考えられている。『メディーア』は、1日だけ退去猶予をもぎ取ったメディーアによる陰謀がその日のうちに果たされ、つねにコリントスのメディーアの住居の前で、メディーアによる復讐劇が遂行されるという点で、三一致法則を完全に満たしている作品である。

一方、『猫ヶ沼のほとりで』に即して言えば、明け方から夕暮れまでのほぼ半日の間に劇は展開され、「時の一致」は完全に守られている。「場所の一致」に関しては、第1幕と第3幕はほぼ共通するが、第2幕は別の家で行われているため、不完全である。(第2幕の舞台セットを常時舞台に置くことで、統一感を持たせようとする演出がなされたらしいが。) その意味では「筋の一致」も完璧とは言えない。いわゆるサブ・プロットのような、別個の内容の話が展開されているわけではなく、ヘスターを主軸にアクションの緊密な統一はある程度まで満たされていると思われるにしても。

(5) ヘスターのセクシュアリティ

この劇は、単純に言えば、土地と金の誘惑に負けた男が、長年の内縁関係にある女を捨てて、別の若い女と結婚しようとしたために生じた、男女の三角関係のもつれを主軸に展開する。ヘスター40歳、カーシジ30歳、キャロライン20歳。この10歳刻みの年齢差設定は、男が別の女の若さに惹かれていく構図を明瞭に示すとともに、ヘスターにとっては自分の半分の年齢の若さに対する激しい嫉妬を生じさせる。キャロライ

ンの子守りをしたヘスターにとって、ほとんど親子ほどの年齢の開きがあるのだから。

ヘスターとカーシジの出会いは、テキストの台詞から分かるように、ヘスター26歳、カーシジ16歳のときである。二人の間にジョウジーが生まれるのはヘスター33歳、カーシジ23歳。つまり、恋愛前期の7年間、二人の間には子どもはいなかった。これは偶然、妊娠に至らなかったのかもしれないし、避妊対策を施していたからかもしれない。カーシジが未成年の10代のときに出産すれば、子どもの養育は経済的社会的に困難であり、カーシジの成年を待って計画的に懐妊したことも推測できる。いずれにせと、二人の出逢いがカーシジが16歳という未成年の頃だったことは、留意すべきである。

「最初にあんたとは関わりを持ちたくなかったし、自分の最初の直感を信じるべきだったけれど、あんたはひっきりなしにやってきた。あんたは私で筆下ろしをし (cut your teeth on me), かじりつき, しゃぶりつき, 最後に残ったのは古い骨が1本きり, もう私なんか用済みになったもんだから, そいつをあんたは肥溜めに放り投げようと考えている」(208) と、ヘスターは激しく恨み言をぶつけている。骨付き肉を貪り食らう旨の比喻表現は、男女の性愛の言及としてはかなり露骨な表現であるが、若いカーシジとのめくるめくような情交に惑溺したヘスターの生々しい体験がほとぼしっている。カーシジを奪う新婦キャロラインに対する、以下のあけすけな台詞にも同様なセクシュアリティが漲っている。

ヘスター …ほかでもない私のベッドのなかで、彼は卑屈な犬っころから、ひとかどの男にゆっくりと変わっていったのよ。だから、不感症の、お父さんっ子の小娘風情 (frigid little daddy's girl) に、彼を奪われてなるもんですか。(205)

もう一箇所、かつての桃色遊戯を仄めかして、キルブライド夫人を憤慨させる台詞も、挑発的である。

ヘスター 本当に楽しかったわよねえ、カーシジ、トレーラー・ハウスで過ごした、あの多くの夜、私はあんたを「たらしこみ」、お宅さんは窓をバンバン叩いてて、私たちは笑い声を聞かれないように、口元に枕を押し当てたりしたわよね。(225)

少年カーシジに愛の手ほどきを施し、立派な「男」に仕立てていった自信にあふれる

ヘスターにとって、婚前交渉があったのかさえ怪しい、純情おぼこ娘のキャロラインは、とうてい恋敵とはいえないほどの年季と貫禄の差が感じられる台詞である。寝返ったカーシジに対する激しい執着の背後には、底なし沼のように果てしない、女の本能的性衝動（リビドー）と情念が蠢いている。ヘスターのセクシュアリティの側面は、さらに掘り下げてみるべき主題である。

(6) 不在の親と自我を求める魂

セクシュアリティの問題を別にすれば、主人公ヘスターに関してもっとも哀切に観客・読者に訴えてくるのは、幼い頃に蒸発した母親との再会を願う、切ない心である。次第に薄れゆく記憶のなかで母親の印象的な面影は、葉巻に口を近づける独特の仕種程度しか残っていないという。なぜ、母は自分を捨てたのか、自分になにか落ち度があったのだろうか、ほんとうに周囲が非難するような、だらしのない女だったのか、いま、どこにいて、なにをしているのか——狂おしいばかりの疑問の渦が湧き起こり、鎮める手立てはなにもない。

しかしながら、実際には、ヘスターは母親についてかなりの定着したイメージを保持しているように受け止められる台詞がある。弟ジョウゼフの亡霊に、母親のことを尋ねる一節を見てみよう。

ヘスター …母さんはどんな人だった？

ジョウゼフ そうねえ、まず、大柄で…優しかったね。

ヘスター 優しい！ 母さんは、怨みごとばかりこぼすウドの大木で、ウイスキー呑み特有のひどい性格をしてたわ。(中略)私の心臓は母さんが殴りつけるようになるまではどこも悪くなかったわ。嘘つきよ、母さんは。

(229-230)

母親から疎外されていた怒りを割り引いても、ヘスターは母親の酒癖の悪さや体罰・折檻、その巨漢ぶり、虚言をしっかりと脳裏に焼きつけているように思われる。おそらく、彼女が覚えているのは、まさにこうしたマイナス・イメージのものばかりであり、自分は知らないけれど、こんな母親にも、なんらかの長所や美点があったに違いない、という期待をこめて、ことあるごとに、母親についての質問を浴びせているのではないだろうか。時間の経過とともに母親を実際以上に美化していくには不適切な思い出ばかりのヘスターは、せめて一つでも、母親を尊敬できるような、心を慰められるようなエピソードに出会いたかったのかも知れない。

思えば、人間の生は不思議なものである。赤ん坊としてこの世に生まれ、成長し、老いてこの世を去っていく。この世以前の世界、いわゆる前世があったのか、あったとすれば自分はなにをしていたのか。この世以降の世界、いわゆる来世はあるのか、あるとすれば自分はなにをするのか。人生という短い切れ端の両端に、永遠に伸びているはずの未知の世界が見通せないまま、人間はのろりのろりと進んでいく。未来を予知できない無力な人間がせめて知りたいと願うのは、自分の出発点である誕生前後の事実や、記憶に残らぬ幼時期の自分の行動や様子、あるいは自分を産み育てた親に関するさまざまな情報であろう。

ヘスターの母親ジョウジーは、ヘスターが7歳の頃に失踪した。他の土地で生存しているのか、失踪時に自殺したのか、あるいは失踪後しばらくして亡くなったのか、誰も知らない。ヘスターの記憶は、したがって7歳の時点で停止・凍結している。以後、更新されることも修正されることもなく、時間の経過が記憶を不鮮明にしていくばかりである。

想像してみれば分かるように、大人になれば、7歳の頃の親友の外見すら、明瞭な輪郭を結ばないだろう。自分の7歳の頃の実体験ですら、克明に覚えている事柄は僅かである。7歳で母親に捨てられたヘスターにとって、人生の最初の7年間は徐々に濃い闇に閉ざされつつある。ヘスターが母親を待ち侘び、再会を希^{こいねが}うのは、もちろん母親への情愛ゆえであるけれども、失われた7年間における自分の原初の記憶を呼び戻して、自分は何者だったのかを明らかにしてくれる語り部の役割を、母親に期待しているためでもある。親は子に誕生の喜びを、幼時の様々な出来事を、もつともつと語っておかねばならない、と痛切に思う。ヘスターも娘ジョウジーに彼女の幼いころのことを語って聞かせるべきだろう

それにしても、ジョウジーの無邪気さ、頑是なさは若干気がかりなほどである。通常の会話もできるし、自分の名前も綴れるのだが、父親が母親とは別の若い女性と結婚することの意味をまったく解さないほど、社会的常識に欠けているのはどうしたことだろうか。テキストを読んでいて、ジョウジーの天真爛漫な言動に、軽度の知的発達障害の兆候を感じたことを付言しておきたい。

(7) 現代アイルランド社会の観点から

この作品は8年前の1998年の初演であるから、現在のアイルランド社会の実態が如実に反映されていると推測できる。アイルランドの家族生活や雇用に関する最近の邦訳資料があるので、そこから引用しつつ、作品と関連づけてみたい。

悲劇の発端は、ヘスターが認知されない子、私生児として人生の一時期を過ごした

ことに由来する。「アイルランドでは、婚姻関係にない出生の発生は、1980年代までは低かったが、その割合は急激に増加し、2000年には3分の1に達するまでになった」²⁸⁾というから、未婚の母親による非嫡子の存在は、こんにち決して珍しくないことがわかる。

法律上、ジョウジーはヘスターの子として扱われ、カーシジは正式の父親として認められていないと思われる。つまり法的には、ジョウジーはいわゆる「片親」によって養育されている訳だが、資料ではこうした例を「ひとり親家族」と呼び、以下のように、政策面で「ひとり親世帯給付」(OPFP)などの優遇措置が実施されていることを指摘している。

アイルランドの政策では、ひとり親は特別のグループとして扱われ、ひとり親が扶養している子ども(18歳までであるが「子ども」が高等教育に在籍している場合には22歳まで)をもっているかぎり、給付の受給の条件として求職活動をするという強制はおこなわれない。(中略)アイルランドのひとり親給付は月額最大642米ドルとなっている²⁹⁾。

アイルランドにはひとり親むけの給付があり、その給付は、その給付と結合して高い収入を得た場合でも給付を失うことはなく(中略)、また、その期間は長期にわたる(中略)。この政策への支出はGDPの0.6%に達する。大半のアイルランドのひとり親にとっては、社会福祉は主要な、または唯一の所得源泉である。(中略)仕事を離れた場合の所得は生産労働者の平均収入の53%(月額1050米ドルのすぐ上)に達する³⁰⁾。

この給付政策がヘスターにも適用されていたとすれば、就労していないと思われるヘスターに月額7万円程度の給付金が支給され、ジョウジーが18歳(進学すれば22歳)までの今後11年間は継続支給されるものと推測される。これは、わが国の厚生年金の水準よりも恵まれているといえよう。しかし、当然ながらこの手厚い制度の存続は、ヘスターが自発的に就労しようとする意欲を奪いかねない。実際、ひとり親の失業率は55%と高水準にある(日本では15%)³¹⁾。こうした現状にかんがみて、「ひとり親世帯給付」の弊害と将来の課題について、報告書は以下のように指摘している。

給付に依存してひとり親が利用できる長期の休暇は、結果として何人かの子どもが貧困のなかで、仕事もなく、場合によっては社会的に排除された状態のなかで育

っていくことにつながる。受け身の給付を多年にわたって受給しつづけることは誰の利益にもならない。子育てへの支援を含めて、幼児をもつ対象者が仕事につくための援助をより早期に、またより積極的におこなう必要性があるが、現存する希望対象者むけの技能を向上させるための包括的な手法についても発展させる必要がありそうである³²⁾。

かつてのアイランド社会では、ヘスターのように幼い子どもを持つ女性が、労働の場に参画することを肯定的にとらえず、女性の役割は専ら家庭を守ることにあると考える風潮が支配的であった。これは国家の基本方針として憲法においても規定されており、女性の社会的経済的自立を著しく阻害してきた経緯がある。すなわち、

アイランドの政策は、比較的最近まで、伝統的なジェンダー分業を反映していた。1973年までは、結婚した女性は公務部門で働くことを禁止された。また1980年代にいたるまで、税制のなかに第2の稼ぎ手を財政的に著しく不利にする制度が存在していた。伝統的な立場は、憲法41条2項2のなかに保持されている。そこでは、「国は、母親が労働に従事する経済的必要性を担うことにより、家庭においてその責任をなおざりにしないための処置を確保（中略）することに努めなければならない」と規定している³³⁾。

しかしながら、近年になって、ようやくこうした束縛的な法規制が崩壊の兆しを見せ始めている。『猫ヶ沼のほとりで』初演の3年前の1995年には、離婚禁止の法律が撤廃され、離婚成立の前提として4年間の別居という条件はあるものの、それが満期を迎えた2000年以降、離婚発生件数は増加している³⁴⁾。婚姻制度や家庭維持の呪縛を解かれた女性たちは、労働によって社会進出を果たすようになってきている。30歳代前半の女性の雇用率は、1983年の29.1%から2001年の68.9%へ2倍以上に上昇し、とりわけ20歳代後半のアイランド女性の雇用率は今日（2002年）では77.7%にも達している³⁵⁾。

因習的家族制度の解体を国家がなかば黙認する姿勢に転じた一方で、長年にわたってこの国の政策の不備が指摘されてきたのは、保育の分野である。ネグレクトに近い形で養育を拒否されたヘスターの場合は極端な事例であるにしても、母親が安心して労働市場に進出するには、子どもたちの世話を預かる社会的体制が整備されていることが前提条件となるが、残念ながら、アイランドでは公式・非公式の保育料は他国と比べて突出して高価であるとされる。たとえば、有給の「子どもの世話人」（自分で

子どもの面倒をみている核家族の母親が、3人までの他の子どもたちを保育する制度)を雇えば、子ども1人あたり月額およそ550ドル、6万円近くかかってしまい、それだけで「ひとり親世帯給付」が帳消しになってしまうような現実が存在する³⁶⁾。いきおい、保育は身近な友人や親族という個人的なネットワークに依存する傾向が高まってしまう。

すでに見たように、『猫ヶ沼のほとりで』では、ジョウジーの遊び相手をするのは祖母のキルブライド夫人であるし、彼女の朝食の面倒をみてるのはご近所のモニカおばあさんである。「アイルランドの父親は明らかに日本の父親よりは多くの時間を家事と育児に使っている」³⁷⁾という統計資料が示すように、カーシジもジョウジーの裏表の衣服を直し、家畜の様子をいっしょに見に連れて行くなど、積極的な育児参加の姿勢が窺える。ヘスターが幼い頃には、猫女やモニカ、ゼイヴィアまでもが、他人の子どもでありながら、絶えず配慮を欠かさなかった。裏返して言えば、こうした伝統的民間ネットワークの存在が、近代的保育施設拡充の気運を挫くという皮肉な連鎖を生んでいるのではあるが。

アイルランドの出生率は、過去20年間に急速に低下しているものの、相対的にはなお人口の再生産率に近い水準にあり³⁸⁾、今後ともアイルランド人口は増加を続けると予測され、2050年には480万人に達すると見込まれる。これは2000年と比較して25%もの増加であり、人口が減少傾向へ向かいつつあるわが国からすれば、驚異的な現象である。しかし、より緩慢であるとはいえ、1990年以前の出生率の急速な低下のために、アイルランドでも高齢化が進行しはじめると予測されている³⁹⁾。

『猫ヶ沼のほとりで』でも、3人の若者(ジョウゼフ、ブライアン、ジェームズ)の早すぎる死が語られる一方で、60代の登場人物が3人、80歳の神父も登場している。カトリックの子沢山、と揶揄気味に呼ばれた時期は遠く過ぎ去り、アイルランド社会も高齢化社会をまもなく迎えるのであろう。

テキスト

- 1) Judy Friel and Sanford Sternlicht (eds.), *New Plays from Abbey Theatre Volume Two 1996-1998* (New York: Syracuse University Press, 2001).
- 2) Marina Carr, *Plays One* (London: Faber and Faber, 1999).

テキストは、読み易さの観点から、大きな版型の1)を使用し、拙訳による引用文の末尾に1)の頁数を括弧内に付した。

注

- 1) アイルランド語で‘carr’は、「自動車」の意味と「堅くなった外皮（表面）」「コーティング」「岩だらけの小区画の畑」の意味がある。[前田真利子、醍醐文子（編著）『アイルランド・ゲール語辞典』（大学書林、2003年）]前者に関して言えば、「アイルランド語から英語に輸出された言葉も結構あって、われわれは知らずにアイルランド語を使っていることがある。carはアイルランド語の「CARR」からきている。ジュリアス・シーザーによると、馬で引くケルト人の二輪の戦車を示す用語だったらしい。」「北村元『日本には思いつかないイギリス人のユーモア』（PHP研究所、2003年）、p.38.」
- 2) Faber版では、*By the Bog of Cats...* と省略符号付き。標題が歌詞の冒頭行からの引用であることを明示するためであるが、Syracuse UP版では省略符号を割愛している。
- 3) 綴り字からは「スウェイン」と発音するのが一般的であろうが、同僚の英国人インフォーマントによれば、「スワン」と発音する場合もありうる、とのことであり、ここでは〈白鳥〉を直接に連想させる「スワン」を採用する。
- 4) 継続した内縁関係の現実性を尊重してか、カーによる登場人物一覧表では、父親側の「キルプライド」姓が与えられている。なお、この姓は、語源は誤りであるが、「新婦殺し」(kill bride) を連想させる語感がある。
- 5) ケン・ロウチ (Kenneth Loach, 1936-) 監督映画『レイニング・ストーンズ』(*Raining Stones*, 1993) は、失業中の父親ボブ (Bob Williams) が娘コリーン (Coleen) のために、初聖体拝領の白いドレス、靴、ヴェール、手袋一式を買ってやりたい親心から、事件に巻き込まれる悲喜劇である。わが国の「七五三」に近い儀式であり、親の熱い思い入れが伝わる作品である。
- 6) ヘスターは、自分の名前が誰にちなむものでもなく、何も意味しない (229) と嘆くが、この名は「エスター」(Esther) の異形で、ペルシア語で「星」を意味する。ヘスターの母親が夜空のオリオン星に祈りの文句を捧げていたという行為と関連するかもしれない。
- 7) Mary Rafferty and Eoin O'Sullivan, *Suffer the Little Children: The Inside Story of Ireland's Industrial Schools* (New York: Continuum, 2001) によれば、この授産学校をめぐるのは、次のようにいくつかの「神話」が存在するという。①子どもたちは宗教団体の慈善の対象であるという神話——実際には文部省の管轄下におかれ、補助金が宗教団体に交付されている点で国家や行政の責任である。②孤児院に等しい施設であるという神話——大部分の子どもたちは両親ないし片親がいる。③未婚の母の収容施設であるという神話——ごく少数に限られる。④刑法犯の子どもたちの矯正施設であるという神話——刑事罰を受けた者はやはりごく少数である。⑤主として少年向けの施設であるという神話——実際には、少女の収容者数の方が上回る。

こうして解体された神話のなかから取り出された事実は、両親が貧困なために追いやられた施設が「授産学校」である、という単純な事実である。授産学校の内部では過酷な体罰や性的嫌がらせが横行し、その実態はテレビ・ドラマ化されて1999年4月から5月の3週にわたって『恐怖の状態』(*States of Fear*) という標題で放映された。3回目の放映日にあたる5月11日、アイルランド政府はこの非道な施設の犠牲者に対して公式に謝罪声明を発表した。

授産学校や教化院、私立孤児院、救貧院などが構成する福祉更生システムの一翼を担っていたのがマグダレン洗濯所である。これはピーター・ミュラン (Peter Mullan, 1959-) 監督・脚本映画『マグダレンの祈り』(*The Magdalene Sisters*, 2002) のなかでも、その過酷な労働現場が描かれているし、扱われる時代はヴィクトリア時代が中心だが、アイルランド国内の少女感化施設の変遷を克明に辿った研究書に Frances Finnegan, *Do Penance or Perish: A Study of Magdalen Asylums in Ireland* (Piltown, Co.

- Kilkenny: Congrave Press, 2001) がある。
- 8) 佐藤亨『異邦のふるさと「アイルランド」—国境を越えて』(新評論, 2005年), p.138.
 - 9) Peter Somerville-Large, *Ireland From the Air* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1997), p.19.
 - 10) Brendan Lehane, *The Companion Guide to Ireland* (Woodbridge, Suffolk: Boydell & Brewer, 2001), pp.120-121.
 - 11) 大野光子(訳編)『ファラオの娘—ヌーラ・ニー・ゴーノル詩集』(思潮社, 2001年), p.18.
 - 12) 上掲書, pp.22-23.
 - 13) 上掲書, p.68.
 - 14) スティーヴン・リン(笠井逸子 訳)『グリーンフィールズ—アイルランド田舎日誌』(新宿書房, 1999年), pp.220-221. [原著はStephen Rynne, *Green Fields: A Journal of Irish Country Life*, 1938.]
 - 15) Shaun Richards (ed.), *The Cambridge Companion to Twentieth-Century Irish Drama* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p.161.
 - 16) ジャン・シュヴァリエ, アラン・ゲールブラン(金光仁三郎ほか訳)『世界シンボル大事典』(大修館書店, 1996年), pp.764-765. [原著はJean Chevalier et Alain Gheerbrant, *Dictionnaire des symboles*, 1982]
 - 17) Yvonne Carroll (retold), *Irish Legends for Children* (Dublin: Gill & Macmillan, 1994).
 - 18) Dáithí Ó hÓgáin, *Irish Superstitions* (Dublin: Gill & Macmillan, 1995), p.62.
 - 19) Sir William Robert Wills Wilde, *Irish Popular Superstitions* (Dublin: Irish Academic Press, 1979), p.126.
 - 20) 白井祥平(編)『世界鳥類名検索辞典・英名篇』(原書房, 1992年)によれば, Black Swanは, 「コクチョウ [Cygnus Atratus] カモ科: オーストラリア」, 日外アソシエーツ編集部(編)『動物レファレンス事典』(日外アソシエーツ, 2004年)によれば「体長115-140cm オーストラリア, ニュージーランド」とのこと。
 - 21) 上村くまこ『白鳥のシンボリズム』(御茶の水書房, 1990年), pp.328-329.
 - 22) 上掲書, p.329.
 - 23) Hyangsoon Yi, *The Traveler in Modern Irish Drama* [PH.D Thesis] (The Pennsylvania State University, 1997), p.3. [UMI No. 9732406]
 - 24) 海老島 均, 山下理恵子(編著)『アイルランドを知るための60章』(明石書店, 2004年), pp.88-90. 該章執筆担当者は澤田倫子。
 - 25) ジョージ・グメルク(亀井好恵, 高木晴美 訳)『アイルランドの漂泊民』(現代書館, 1993年), p.57. [原著はGeorge Gmelch, *The Irish Tinkers* (Waveland Press, 1985)]
 - 26) *New Plays from Abbey Theatre Volume Two 1996-1998*, pp.xvi-xvii.
 - 27) テリー・ホジソン(鈴木龍一, 真正節子, 森美栄, 佐藤雅子 訳)『西洋演劇用語辞典』(研究社, 1996年), p.181.
 - 28) OECD(編著), 高木郁郎(監訳), 麻生裕子, 久保田貴美, 松信ひろみ(訳)『国際比較: 仕事と家族生活の両立—日本・オーストリア・アイルランド』(明石書店, 2005年), p.128. [原著名*Babies and Bosses: Reconciling Work and Family Life—Austria, Ireland and Japan—Volume 2* (OECD, 2003).]
 - 29) 上掲書, p.236.
 - 30) 上掲書, p.239.
 - 31) 上掲書, p.229.
 - 32) 上掲書, pp.27-28.

- 33) 上掲書, pp.53-54.
- 34) 上掲書, p.144.
- 35) 上掲書, p.41.
- 36) 上掲書, p.30.
- 37) 上掲書, p.89.
- 38) 上掲書, p.16.
- 39) 上掲書, p.61.

参考文献

○マリーナ・カー関連

- Cathy Leeney and Anna McMullan (eds.), *The Theatre of Marina Carr: 'before rules was made'* (Dublin: Carysfort Press, 2003).
- 舟橋美香「マリーナ・カーの『ボッグ・オブ・キャッツのほとりで』—現代アイルランドのメディア」, 青山誠子(編)『女性・ことば・ドラマ—英米文学からのアプローチ』(彩流社, 2000年), pp.411-421.
- 舟橋美香「物語が伝説となる場所—マリーナ・カーの劇世界、『ザ・マイ』の場合」, 手塚リリ子・手塚喬介(編)『想像力の飛翔—英語圏の文学・文化・言語』(北星堂書店, 2003年), pp.457-467.

○ギリシア悲劇関連

- 丹羽隆子『はじめてのギリシア悲劇』[現代新書1433] (講談社, 1998年)
- 中村善也^{ぜんや}『ギリシア悲劇入門』[同時代ライブラリー186] (岩波書店, 1994年)
- 丹下和彦『ギリシア悲劇研究序説』(東海大学出版会, 1996年)
- 丹下和彦『女たちのロマネスク—古代ギリシアの劇場から』(東海大学出版会, 2002年)
- ジョージ・スタイナー (海老根宏, 山本史郎 訳)『アンティゴネの変貌』(みすず書房, 1989年) [原著は George Steiner, *Antigones* (Oxford University Press, 1984)]
- 松平千秋ほか訳『ギリシア悲劇全集 第三巻』(京都市:人文書院, 1960/64年) (エウリピデスの『メディア』は中村善也 訳)
- 松平千秋ほか訳『ギリシア悲劇全集 5』(岩波書店, 1990年) (エウリーピデースの『メーディア』は丹下和彦 訳)
- 小川正廣・高橋宏幸・大西英文・小林標^{こずね} (訳)『セネカ悲劇集 1』(京都大学学術出版会, 1997年) (『メディア』は小林 訳)
- ソポクレス (福田恆存 訳)『オイディプス王・アンティゴネ』(新潮文庫, 1989/2004年)

○その他

- 映画プログラム『マグダレンの祈り』(ガーデンシネマ・イクスプレス第101号) (ヘラルド・エンタープライズ, 2003年)
- Bartholomew Gill, *The Death of An Irish Tinker: A Peter McCarr Mystery* (New York: Avon Books, 2001)
- 沖浦和光^{かずてる}『幻の漂泊民・サンカ』(文藝春秋, 2004/5年) [親本は2001年刊]
- 筒井 功『漂泊の民サンカを追って』(現代書館, 2005年)